第八十号

会報

浄土真宗

太陽の会

「盂蘭盆会報告」

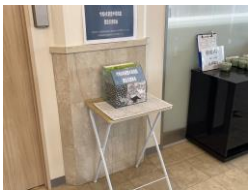
八月十二日(月)に盂蘭盆会を開催しました。当日は、空の青さが真夏の到来を告げる中、多くの会員様にお参り頂くことができました。亀谷好慧先生を導師に迎えて読経と法話をいただきました。

盂蘭盆会は、7世紀ごろから伝わる習慣で中国の仏教思想と日本古来からある祖霊信仰という先祖を敬い感謝する信仰が合わさり日本独自のかたちになったと言われています。『日本書記』には斉明天皇の時に盂蘭盆会を催した記録が残っています。奈良、平安時代には宮中の行事として行われるようになり、恒例行事として毎年行われていました。次第に貴族や武家などに広まり鎌倉時代の終わりには民衆にも広がり江戸時代には現在のかたちが定着してきました。この頃には家庭でのお盆飾りや迎え火・送り火など今と殆ど変わらない供養のかたちが整ってきたようです。

竜王別院でも、継続的な毎月読経会と8月には盂蘭盆会開催しました。

「能登半島地震支援募金　御礼と報告」

太陽の会では、1階ロビーにて今回の地震により被災された方々への支援として募金活動を行わせていただきました。皆さまから104，294円もの、多大なご協力を賜りました。お預かりした支援金は日本赤十字社を通じて被災された方々にお届けいたします。被災地の、一日も早い復興をお祈りしますとともに、ご協力いただきました皆さまに御礼申し上げます。



【令和六年　行事予定】

○本山（福山）
秋季彼岸会　九月二十二日(日)
午前の部　開式　十時半～
午後の部　開式　十三時半～

○竜王別院（広島）
読経会
九　月十一日（水）九時～
十　月十一日（金）九時～
十一月十一日（月）九時～
十二月十一日（水）九時～

○川上太陽霊園(鹿児島)
秋季彼岸会　九月十四日(土)十時～
追悼法要　十二月八日(日)

「今」　坂村真民氏

大切なのは
かつてでもなく
これからでもない
一呼吸 一呼吸の
今である

暑い日が続きますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。さて、今回は坂村真民さんの「今」という詩を紹介させていただきます。わかっていても日々の生活の中で「明日やれば良いだろう」という怠け心が芽生えてしまい今日できる事を明日、また次の日とついつい後回しにしてしまう事があります。この悪い習慣が身に付いてしまうと人生の多くの時間を無駄にしてしまう可能性があります。

お釈迦さまのお言葉に『出息入息不待命終』とあります。命の長さは、吸う息、吐く息の今しかなく、その一瞬、一瞬に命の尊さがあります。今日できる事は今日片づけて今という一瞬、一瞬にかけがいのない命を感じて生きていきたいものです。

教えて仏事の事⑤
「法事の参拝者はお客さま?」

法事は、主催者である施主とその家族が中心となって準備し営まれるわけですが、同時に、案内を受けて参拝する人たちも法事を営む一員であることを心得ていただかなくてはなりません。

なぜこのような事をお話しするかというと「法事は喪主の勤めで、我々はそこに招待された招待客だ」という意識が参拝者の中にあるように思えるからです。すなわち、施主が招待する側で、その他の参加者が招待されたお客さまであるというふうに捉えがちではと思います。

しかし、法事の趣旨からいうとそれは間違いです。法事は過去に故人に縁のある人たちが参集して、僧侶を招き、ともに仏法を聞き味わうところに意義があります。ですから、施主も参拝した人も同じ立場にあるわけで、法事に集まったすべての人々が共に法事を営む一員だということになるのです。

もっとも、具体的な形に表れる準備や進行は、施主やその家族が行うことになりますので、参拝者は側面から協力することになります。たとえば、親の年忌法要であれば、子である施主の兄弟で費用を分担しても良いでしょうし、参拝者全員に配る粗供養の品を負担しあっても良いでしょう。

この「粗供養」ですが「〇〇回忌志」とも表書きされます。これは単なる引き出物ではなく、本来はご仏前にお供えし、仏さまからのお下がりとしていただくものです。

参拝者が当日お供えするものとしては、一般的に「御仏前」やお花、お菓子、果物といった供物類があります。「御仏前」が施主へのお礼ではないことはいうまでもありません。報謝の心から仏さまにお供えするものであり供物類も同様です。

また、地域によっては「添布施」というのがあり、これは僧侶への施主の御布施に、他の参拝者が添える布施のことです。

いずれも参拝者としてお客様でいるのではなく、積極的に法事に参加いただきたいと思います。

「クイズ浄土真宗」

Q、臨終のとき、仏壇はどうする？

❶ 酷い姿を見せないため閉める

❷ 遺体は別室なのでいつものまま

❸ 開けて、灯明をささげ荘厳する

自宅で亡くなられたとき、また病院から自宅に戻られたときの遺体は、できれば仏壇のある部屋に安置し、仏壇の扉は開けるようにします。

しきたりから言えば、閉めるのは神棚の方です。死を忌み嫌う神に配慮して、白い紙で覆ったりするようです。しかし、仏さまは、生も死もなく、我々の煩悩という濁りにも左右されず、すべての存在を受け入れ、救済のはたらきを発揮されています。亡き人はもちろん、嘆き悲しんでいる遺族の方がたにも、お心をかけてくださっているのが仏さまなのです。

したがって、仏壇の扉を開いて、仏さまの大悲のはたらきを仰ぐのは、むしろ私たちの自然な反応ということが言えるでしょう。仏壇の御本尊・阿弥陀さまに灯明をささげ、香を焚き、花を供えて、そのお心をいただきます。臨終にあたって、僧侶らとお勤めする臨終勤行（枕経）も遺体に向かってではなく、仏壇の仏さまに我が心を向けて行うものです。部屋の都合で仏壇がない部屋に安置した際や、仏壇とご遺体が同じ側にこない場合などは、別にお名号の本尊を懸けると良いでしょう。

また、「北枕」の由来はお釈迦さまが息を引き取った際に、頭北面西右脇臥（頭が北側、顔が西側、右側の脇をしたにして寝ること）のお姿で覚りの境地に至ったと言われることからそのような習慣が根付いています。

Q、臨終のとき、仏壇はどうする？

クイズの答え・③

「歎異抄（たんにしょう）を読む」

『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除くために著した親鸞聖人の言語録です。

念仏をとりて信じたてまつらんとも、
またすてんとも、
面々の御はからひなりと云々

釋蓮如（『歎異抄』第二条）

「僧侶奉職について」

宗教法人　太陽の会に、新たな僧侶が奉職していただく運びとなりました。

これから太陽の会の顔として、精進して参りますので皆様よろしくお願いいたします。

江﨑　宗一郎　先生

「五月～八月のことば」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃるとは思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【五月のことば】

仏さまの光に照されて
私の心に明りがつく

「山本仏骨」

智慧の念仏。信心の智慧は真っ暗な絶望の長き夜にあって、消える事のない大きな灯火です。ひとり夜道を帰る町の灯の下に、いつもの日常の中に、そこに仏の心が通い、仏の心がうつっているのです。お念仏はお寺やお仏壇の中だけではなく、一人一人のいかなるささやかな生活の中にも、生きて光っているのです。お念仏を唱えるごとに自分の心の中の佛心の灯火が強く明かりを放つのです。

【六月のことば】

いい人　いい雨　いい天気
みんな私中心

「大神信章」

善い人悪い人といいますが、それはその時の私の都合やその時の気分で決めているのが、私の現実です。だから、同じ人や同じ雨なのに、私の置かれた状況によって、善い人や悪い人、いい雨や困る雨に変わります。しかも、それで当然だと思っている私がいます。念仏を称え聞法する者は、阿弥陀さまの大慈悲心に育まれることで、自分だけのしあわせを求めている愚かさにきづかせていただき、仏心を学び、仏意にかなった生き方をしようとするのです。

【七月のことば】

行いと言葉の背後に
世間があるか如来があるか

「深川倫雄」

ものごとを冷静に、かつ客観的に捉えることが良いことと教わりながら日常を過ごすことが多いのが私たちではないでしょうか。それは一面では正しいことではありますが、自らの煩悩によって引き起こされているはずの自身の煩悩を、他者によってもたらされているものとすり替えてしまうことも起こりえます。「南無阿弥陀仏」の生活が、私たちの容易には拭い去れない煩悩と、そこから起こる苦悩を解消させてくれるのです。

【八月のことば】

私たちの人生の争いは
いつも善と善との争いだ

「宮城　顗」

ここで挙げられた「善」は、解脱（苦悩からの解放・覚り）を得るために大切なもの、必要なものと考えられていることがわかります。お釈迦さまは人生の根本苦を解決したくて出家したのですから、その釈尊が求めた「善」とは苦の解決、あるいは解決に結びつくものと考えられるもののはずです。その「善」は、自分の心を浄めること、すなわち煩悩を断って覚りを得るためには、罪を犯さず「善」を身に具えなければならない、という仏陀によって説かれた教えに見られる「善」と同じものと考えることができるのです。